

大原生涯学習センター i - y o u t h における若者支援事業の進捗状況について

大原生涯学習センター i - y o u t h における「NP0 法人 Learning for All（以下「L F A」という。）」との若者支援事業について、進捗状況を報告する。なお、困難を抱える子どもへの支援として、有効と判断できる成果が報告されていることから、L F A と締結している「若者支援に関する連携協定」を継続し、令和8年度についても L F A に当該事業を委託する。

1 事業概要

(1) 令和7年度の事業内容（毎週 水曜日・金曜日）

①非登録制：16時から17時30分

大原生涯学習センター1階の i - y o u t h に来ている不特定多数の子どもたちに対して L F A スタッフが関わり、遊びや勉強を通じて、子どもたちの困りごとを拾い上げる。

②登録制：17時30分から20時

困り事を持っている子どもたちを対象とした登録制の個別支援として、困りごとに対する相談支援や子どもたちがやってみたいことを実現するプロジェクト学習を実施する。

③フードパントリー

上記①②の事業区分に関わらず、必要な子どもたちに自宅で簡単に調理することができる食事を配布する。

(2) 活動実績

月	実施日数	参加者数（延べ数）	フードパントリー 配食数（）内は新規配布者数	L F A スタッフ数 （延べ数）
4月	8日	非登録：568名 登録：28名	80食（46人）	43名
5月	9日	非登録：651名 登録：27名	60食（17人）	54名
6月	8日	非登録：512名 登録：24名	58食（17人）	52名
7月	9日	非登録：603名 登録：26名	60食（19人）	58名
8月	9日	非登録：824名 登録：25名	55食（20人）	53名
9月	8日	非登録：593名 登録：16名	60食（35人）	48名
10月	10日	非登録：637名 登録：28名	62食（20人）	71名
11月	8日	非登録：500名 登録：24名	59食（28人）	51名
12月	8日	非登録：446名 登録：24名	43食（15人）	48名
期間合計	77日	非登録：5,334名 登録：222名	537食（217人）	478名
前年比	102.6%	135.5% 111.0%	112.3%（—）	95.2%

※令和7年度は、新たにフードパントリーの新規配布者数を確認した。

2 具体的支援内容（主な成果）

（１）非登録制（i-youthでの見守り活動）

適度な距離を保ちながら見守り体制を築くとともに、継続的に月2回コピック会（プロのデザイナーも使用するペンを使った創作活動）や希望に応じて電子ドラムの練習支援などを交え、会話の機会をつくり、困りごとの把握に努めた。

高校進学など、ライフステージの変化から困りごとを抱えるケースがあった。

【高1女子】入学した高校に馴染めず、他校への転学希望の相談に応じ、試験対策や手続き等をサポートし、転学後も学習面、心理面で、適時のサポートと見守りを継続している。

【高1男子】9年生の時から接点があったが、高校進学後、家庭や学校生活での問題が表出した。i-youthを居場所として継続的に来室しており、悩みごとがあれば、その都度受け止め、一緒に考えるよう継続支援に努めている。

（２）登録制（個別のプロジェクト学習）

現在4名（9年生1名、高校1年生2名、高校2年生1名）が登録しており、昨年度登録者4名のうち2名が卒業し、2名（9年生1名、高校1年生1名）が新たに登録した。

それぞれが不登校や他の居場所で馴染めなかった経験などがあるが、今年度は、学校生活や本事業を通じて、大原生涯学習センターの事業にも積極的に参加する様子がみられた。学校での活動が多忙な時期や定時制高校への通学などで本事業への参加頻度が減ることもあるが、繋がりが切れないよう個々に配慮しながら、居場所としての継続利用を支援し、楽器バンド部、勉強進路部などの「ブカツドウ」の充実も図っている。

楽器バンド部では、i-youthでの音楽イベントへの出演に加え、司会やイベントポスターの制作など、得意なことを活かし、運営側にも関わるなど、活動の幅を広げている。

勉強進路部では、大学生ボランティアによる大学生活についてのプレゼンの機会を設け、進路選択の悩みなども含めた話を聞き、参加者は、大学生活に興味を持ち、自身の進路選択を考えるきっかけづくりとなった。

登録制の子どもたちは、不登校だった経験もあり、これまでは居場所内での活動に留まっていたところから、進学などを機に登校し、学校での活動やi-youth全体のイベントなどでも役割を担う体験を重ねている。事業を継続する中で、登録制の活動が安心安全に過ごせる居場所であるとともに、心のよりどころとして機能しており、自己肯定感の向上や、居場所以外の場でも挑戦できる気持ちが育っている様子がうかがえる。

（３）関係機関との連携

大原生涯学習センターi-youthの利用者には、志村第一・二中学校の生徒が多いことから、継続して両校との情報交換を進めている。

【志村第一中学校】LFAが「学校における居場所推進事業」を週2回実施しており、登校はできているが教室にあまり入れない生徒にi-youthを紹介している。

【志村第二中学校】LFAが月1回の校内委員会に参加し、子どもの情報を共有し、本人のニーズに応じて事業につなぐ体制を築いている。

【その他】子ども家庭総合支援センターとも関係性を構築しており、気になる子どもを発見した場合は、相談や通告を行っている。（令和7年度 通告2件 ※虐待）

3 今後の課題

i-youth利用者から社会的自立にリスクを抱える子どもを発見し支援する事業で

あるが、現状は登録制の参加者が少ない。非登録制の支援事例のように、普段から繋がりを作っておくことで、困難が生じたときにサポートできる体制が必要であり、子どもの変化や困りごとを抱えた子どもを見逃さないよう、次年度も引き続き、利用者と接触する機会を増やすことを目標に、以下の方向性で活動内容を調整していく。

（１）中高生年代特有の問題も踏まえた支援の仕組みづくり

非登録制の中では、アルバイト先での働き方や異性との交際に起因する悩みなど、中高生年代が多く抱える悩みや相談に個別に対応したケースがあった。こうした問題は、場合によっては潜在化し、相談できないまま大きな問題に発展する可能性がある。

日頃からの子どもたちとの関わりに加え、大原生涯学習センターの社会教育指導員とも連携・協力し、悩みや困難を抱える子どもの発見や対応の仕方を検討し、深刻な事態を未然に防ぐための施策なども含め、支援の仕組みづくりを進めていく。

（２）フードパントリー等を活用したコミュニケーションの強化

昨年度は、フードパントリーでの食品配布のニーズが減少し、運用の見直しを検討したが、今年度は、配布のニーズに増加傾向がみられ、毎月、一定の新規利用者がいることを確認した。次年度も利用者のニーズに合わせ、食品を有効なツールとして活用し、コミュニケーションの強化を図っていく。